

岡崎城跡菅生川端石垣調査現地説明会資料

岡崎市教育委員会

【試掘調査】：平成 27 年 12 月 21～24 日

【石垣検出】：平成 28 年 2 月 4 日～9 日 (図 1 地点①～⑤)

平成 28 年 3 月 7 日～11 日 (図 1 地点⑥)

合計約 200m 検出

【菅生川端石垣】

- 菅生川端石垣は岡崎藩 3 代藩主・本多忠利により、寛永年間 (1624～43) に築造が始まり、正保元年 (1644) に完成した (『竜城中岡崎中分間記』『岡崎竜城古伝分間記』の記録による)。
- 岡崎城郭の石垣のうち、文献資料により築造年代が確認できる数少ない石垣として貴重。
- 菅生川端の石垣は全長約 400m で、一連の石垣城壁としては日本最長。
- 一連の石垣に 3 箇所もの四角い突出部「横矢枡形」が存在するのは日本でも岡崎城のみ。
- 横矢枡形とは敵の侵入に二方向からの矢 (鉄砲) が掛けられる構造で、城外郭南辺の防御性を高めるとともに、菅生川を往来する舟から見る岡崎城の視覚的効果を高めている。
- 徳川家臣団である本多氏が横矢枡形を多用した城造りであり、徳川家康の築城思考がみてとれる。
- 石垣は 1 石ずつ表面に「すだれ仕上げ」とよばれる「はつり」による化粧が加えられた丁寧な仕上げ。
- 試掘調査により石垣の総高が 5.0m に及ぶことが判明した (地上部 2.0m、地下部 3.0m)。



図 2 岡崎城絵図における菅生川端石垣

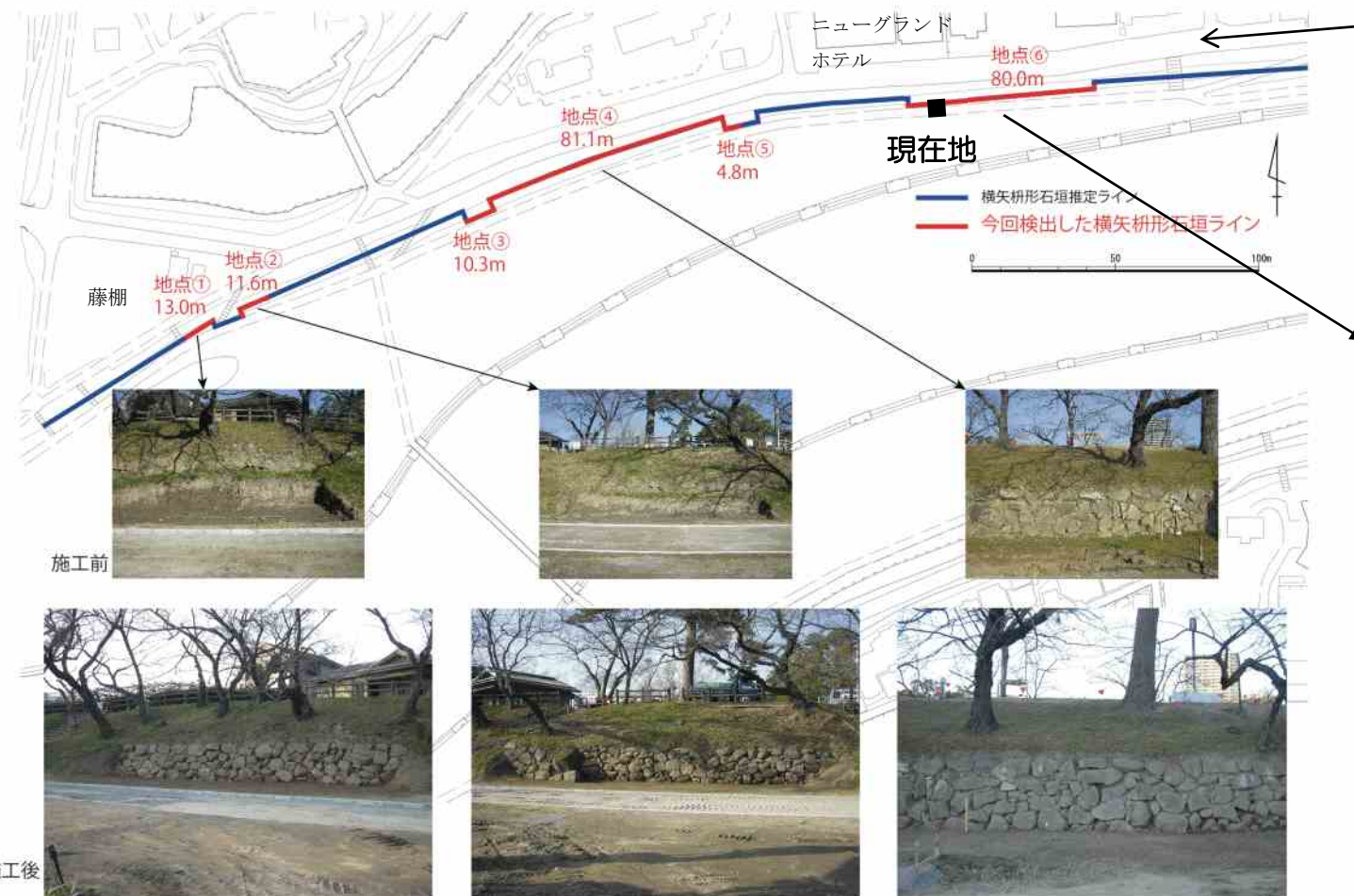


図 1 石垣検出箇所



写真 1 地点⑥石垣検出状況 (調査後)



写真 2 地点⑥試掘調査状況

岡崎城の歴史

明大寺を拠点としていた西郷氏が、西郷頼嗣の代に北方からの松平氏の進出をにらみ、享徳元年(1452)から康正元年(1455)にかけて明大寺地区から乙川を挟んだ龍頭山に砦を築き、北方の備えとしたのが岡崎城の始まりとされる。その後、明大寺を制圧した松平清康が享禄3年(1530)頃に岡崎城に本拠を移し、松平広忠、徳川家康へと継承され城郭整備が図られた。天正18年(1590)に豊臣系大名の田中吉政の居城となって以降、織豊系城郭に改修されてく。

西郷氏がどの程度の砦を築いたかについては不明な点が多い。現在、岡崎城本丸北側に「清海堀」と呼ばれる深さ10m、幅20m程の空堀があるが、これは西郷頼嗣の入道後の号「清海」に由来するとされ、後世の拡張を想定しつつも中世城郭の様相を示す遺構とされるが、詳細は不明である。水野家岡崎藩主時代(1645年以降)成立の『岡崎領主古記』には「権現様の御縄張」が行われたことが記され、家康の岡崎城拡張・整備を伝えるが、同時代の遺構を発掘調査からは見いだせていない。

天正18年(1590)に徳川家康が関東移封された後に、豊臣系大名の田中吉政が入城すると、天守台石垣を築き天守を造営し、岡崎城を織豊系城郭化していった。また、田中氏開削とされる総堀は「田中堀」とも称され、総堀内に東海道を移転するなど城下町の本格的な整備が始まった。

慶長6年(1601)に譜代大名の本多康重が入城し、以後3代続く(前本多家)。元和3年(1617)に三重天守閣を再建し、慶長18年と元和9年の将軍上洛の際の宿泊のために二の丸に御殿をそれぞれ建てた他、3代藩主忠利の時に菅生川端石垣が構築された。

正保2年(1645)に水野忠善が入城すると、本多氏の城郭・城下町経営を受け継ぎ、総曲輪内における土庶混住を整理し、侍屋敷の拡張を行い、総曲輪の出入り口を整備することで城下町の最終的な整備が行われた。これにより、17世紀中頃には投町から松葉町に至る菅生郷の全域が城下町として編成された。

宝暦12年(1762)に松平康福が入城するが、7年後の明和6年(1769)には本多忠肅が城主となる(後本多家)。この頃はあいつぐ災害から藩財政が逼迫し、藩政改革に迫られ、岡崎城郭整備に関する記録は少ない。

明治維新後の明治6年(1873)の廃城令後、城郭内の建物は取り壊された。昭和20年(1945)の岡崎空襲により岡崎公園一帯も被災したが、戦後の昭和34年(1959)には天守閣を復興し、昭和37年には岡崎城跡として岡崎公園部分が岡崎市の史跡に指定されて現在に至る。

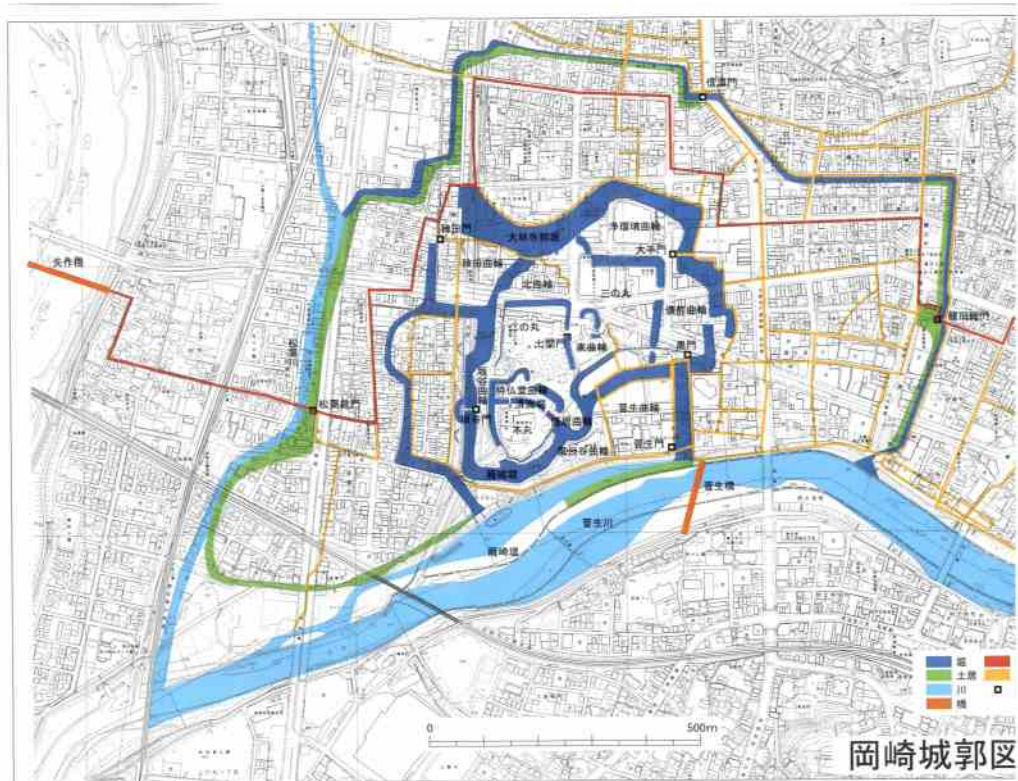


図3 岡崎城郭区

岡崎城跡菅生川端石垣発掘調査 現地説明会の様子

